

## どうする、これからの「日本留学」：岐路に立つ言語・文化圏滞在型留学

野呂博子, ビクトリア大学

木村美香, ビクトリア大学

森川結花, 甲南大学

谷川依津江, 甲南大学

### ✚ これは危機か？それとも、岐路か？

コロナ渦は日本語教育の世界にも大きな影を落としています。中でも、留学生が来なくなった留学プログラムは存亡の危機に立たされていると言っても過言ではありません。国境をまたいだ人の移動が制限され、留学生の往来は許されない状況の中、2020年度中開催予定だった留学プログラムは次々にキャンセルが決まってきました。かつて、東日本大震災や阪神・淡路大震災の時にも一時的に留学生が消えたような時期がありました。しかし、今回のように、世界規模で留学が不可能になってしまうという事態は誰の記憶にもないことではないでしょうか。

同時に、日本語を教える現場では、教育スタイルの大変革という転換地点に立たされています。これも世界規模で起こっている事象ですが、教室での対面授業からIT技術を駆使した遠隔授業へという授業スタイルの大きなシフトチェンジが現在行われています。これによって、現場の関心が一気に「オンライン授業をどうするか」に傾きました。この流れで行けば、コロナ禍が終息してポストコロナ時代が来た暁にも「新しい生活様式」ならぬ「新しい授業形態」が定着しているであろうことは想像に難くありません。

それでは、今後は「留学」というものはどうなっていくのでしょうか。これまでは留学といえば、現地に行って滞在する「言語文化圏滞在型留学」しかありえませんでした。ですが、今後はどうなっていくのでしょうか。教育の世界で常識や価値観が覆っていくとしたら、留学の意義や目的、形態など、これまで常識だったことも覆っていくのでしょうか。そして、たとえば、「バーチャル留学」「オンライン留学」というような形のコースも「留学」の範疇に入るものと認められるようになるのでしょうか。

以上のようなことを参加者の皆さんとともに考えてみたいというのが、このラウンドテーブルの趣旨でした。

なお、話題提供者である野呂・木村の勤務校であるビクトリア大学と森川・谷川の勤務校である甲南大学は交換留学提携校の関係にあります。ビクトリア大学からの甲南大学への留学は、年間プログラムに20余年、夏期日本語集中講座（6週間コース）にも10年にわたる参加実績があります。その間、日本語教員間の間でも情報交換等の連携を行ってきたのですが、今回、あらためて、留学生の送り出し側と受け入れ側という双方の観点から、これまでの「留学」とこれからの「留学」についてじっくり振り返り、意見を交換し合いました。

## ✚ これからの留学はどうなるのか？

まず、ラウンドテーブルの冒頭で、参加者の皆さんに「コロナ終息後、日本への留学生の数は増えると思いますか？」というシンプルな質問を投げかけてみました。結果は、下の図1の通りです。

コロナ終息後、日本への留学を希望する学生の数は増えると思いますか。

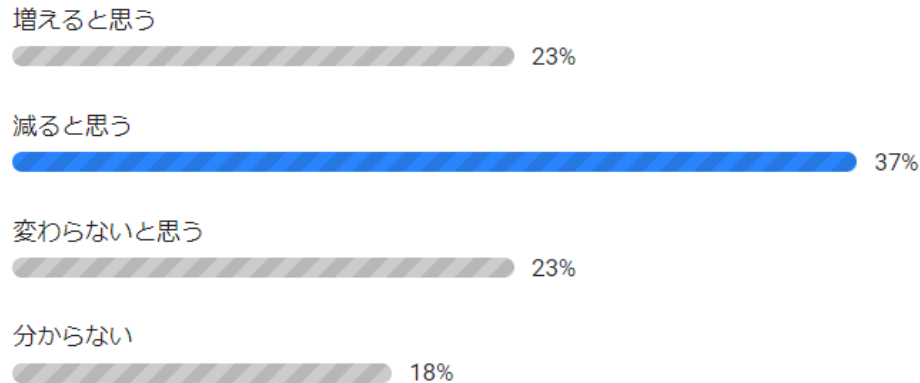


図1 ラウンドテーブル参加者による投票結果

結果は「減ると思う」が最も多く37%でした。確かに、今現在は何もかも先が見えないコロナ禍の真ただ中です。楽観的な予想はできないのが当然でしょう。よくて「変わらないと思う」23%、あるいは、どう考えても「分からない」18%という予想になるのが自然に思われます。そう考えると「増えると思う」の23%という結果が不思議に思われますが、「増える」の根拠としてある投票者から、書き込み用スプレッドシートに次のようなコメントがありました。

「増える」に一票投じたのは夏期講座と YiJ が中止となった学生が次年度に自分達の枠が確保されたままなのか、と聞くメールが来たからです。少なくとも来年度は今年行けなかった学生と合わせてたくさん行くと思います。一方、YiJ が半分オンラインになったりすることがないか（なってほしくない）等心配があると聞かれましたがどうでしょう。

つまり、留学が可能になる日を待ちわびている学習者がいるということですね。この情報をシェアしていただけて、留学生受け入れ側の立場としては心強くうれしかったです。しかし、私たち自身にも将来について何も約束することができません。というわけで、非常に複雑な思いにうなだれるしかありませんでした。

## ✚ 苦境に立つ「留学プログラム」

コロナウィルスの感染が拡大してきた 2020 年前半、甲南大学 Year-in-Japan プログラムは 1 月から始まった春学期の真ただ中にありました。順調にプログラムの行程を進み、さあ、来週は中間試験という 3 月第 1 週、協定校の一つから突然の帰国命令が下りました。それからは数日おきに数名ずつの帰国が相次ぎ、30 名いた留学生が 19 名にまで減っていきました。3 月 27 日からはプログラムの日本語および Japan Studies の授業すべてが対面授業から遠隔授業の形に移行。4 月の第 1 週には緊急事態宣言に伴って全留学生の帰国が決まりました。春学期は帰国した留学生を対象に遠隔授業の形で続けられ 5 月半ばに終了しました。

この一連の経過の中で、日本での留学生生活を突然奪われることになった留学生たちは極度の不安と落胆を味わいました。また、私たち教師、学内のスタッフ、ホストファミリー、予定されていた広島研修旅行先の地元大学生や被爆者講話のおばあちゃんまで、関係者一同、無念でなりませんでした。

その後、甲南大学の留学プログラムは、2020 年度の夏期日本語プログラムも、2020-2021 年度秋学期の Year-in-Japan プログラム秋学期もキャンセルとなりました。現在は 2021 年春学期のプログラム再開に一縷の望みをかけ、プログラム参加希望者向けの「留学前準備学習コース」をオンラインで提供することが決まり、その開講に向けて準備を進めています。

しかし、言うまでもなく、プログラム再開がいつのことになるのか、それは誰にも分かっていません。阪神大震災以来の悪夢を見ているような苦境に立たされていることを甲南大学の関係者はひしひしと感じています。

#### これまでの「言語文化圏滞在型留学」とは何だったのか？

2020 年春学期中に始まったコロナ禍は、夏が来て秋学期を迎える頃が来ても世界から消えていくことはありませんでした。そのため、世界中のほとんどの大学での秋学期の授業はオンライン化され、対面授業に戻る日も遠いということになっています。そうなると、今は「留学の夢」に思いを馳せることすら無理な気さえます。もし、今考えられるとしたら、それは「オンライン留学」「バーチャル留学」と呼ばれるような形態のものでしょうか。

しかし、「現地に行かない留学」について考えるとき、私たちはもう一度、これまでのスタイルの留学、すなわち「言語文化圏滞在型留学」にはどんな意義や価値があったのか、留学を経験した学習者は何を得て、どのように留学前後で変化したのかを振り返ってみる必要があります。

ビクトリア大学から甲南大学夏期日本語集中講座に過去 5 年間の間に参加した学習者に対して行ったアンケート調査によると、学習者自身は留学の成果を次のように感じていました。

#### 【質問】 このプログラムで得たことは何ですか？

- ・ 日本語能力の向上、日本語を使う自信
- ・ 日本文化・歴史・社会（生活）の理解
- ・ 旅行その他

- ・積極的になった、自立できた
- ・新しいことに挑戦できたこと
- ・自分に自信が持てるようになった
- ・視野が広がった（カナダに戻って新しい視点で物事が見れるようになった）
- ・自分と違う価値観を持つ人との交流から学べた

（27名中11名からの回答）

つまり、6週間の日本留学を経験して、学習者自身は①日本語能力の上達と②人間的な成長という成果が得られたと感じていると総括できます。特に、②人間的な成長の方を本人たちは強く確かなものとして実感できたようです。

甲南大学 Year-in-Japan プログラムでも、プログラム参加当初と修了時の留学生の変化について、日本語の proficiency の変化に関する客観的なデータと、留学生自身の振り返りアンケート調査から以下のようにまとめることができます。

- ①日本語能力に関して、上達の度合いは個人差が大きいですが、多くの学習者が自分の能力が日本語社会の中でどの程度のレベルに達しているか、客観的に判断できるようになる。
- ②生活経験を通して、様々なコミュニティーとのつながりを得、予期せぬ出来事と出会いを繰り返しながら人間的にも日本語話者としても成長する。

実際に、プログラム修了生の一人からは、こんな声も聞かれました。

「留学は不可欠ですよ。言語をうまく話せるようになるために異文化の中で暮らすんじゃなくて、異文化の中で暮らせるように言語をうまくするもんだと思いますので。もともと日本人が好きで日本語をもっとうまくなろうと思ったし、日本に行って学んだ日本語ももちろん多いです。大学行って留学しないなら行く意義がないと思うほどです笑。まあ留学以外にもたくさんいい経験ありますけどね、でも損は間違いなくします。（社会人になってから留学しても）遅い訳ではないと思うんですが、やっぱりまだ成長しているうちに行くと感じる影響がその分大きいと思います。」

（SNS上での調査者とのやりとり）

この証言から、この修了生にとっては留学経験が、青年期的人格形成に大きな影響を与える刺激となっていたということ、いわば、留学が成長の「節目」となっていたと認めることができるようです。もちろん、これも最終的には個人に帰するところ大ですが、「留学」とは、「一人の人間の中で何かを大きく変化させる“巧妙な仕掛け”である」と言えるのではないのでしょうか。“巧妙な仕掛け”とは、それが作為的、意図的に設定されたものではないということです。留学生活の中では、まったく偶然に思いがけない出来事が降りかかってくる。それに対して留学生は、何としてでも対応していかなければなりません。そのプロセスを通して言語面と人間性の両面が鍛えられていくというのが「留学」というセッティングなのです。

ちなみに、甲南大学 Year-in-Japan プログラムの修了生たちには大学卒業後、「二度目の留学」をするケースが多くみられます。その典型が「JETプログラム」です。JETに参加した別の修了生によると、「Year-in-Japan プログラムの留学期間は、あまりにも楽しく忙しく、目くるめく毎日の連続だった。だから、もう一度、落ち着いて日本に行って、日本と自分の関係を見つめたい」という理由からJETプログラムに参加を決めたということでした。

現代の若い世代の人たちにとって、先の人生は長く、生き方の選択肢も多く多様化しています。何を選択してどう生きるのか、自分がどんな人間に成長しようとしているのか、見つけるまでには長いプロセスが必要なのです。そんな彼らにとって、成長過程のポイントに「留学」という仕掛けを組み込むことが大きな意義があるのだと言えるのではないのでしょうか。

### 🌈 みんなが抱いている「留学」のイメージ

ラウンドテーブルの参加者の皆さんにも、滞在型留学について、ご自身が抱かれているイメージを短い言葉で表現していただきました。その結果を図2に示します。

「滞在型」の「留学」に、どのようなイメージをお持ちですか？（10字以内で）

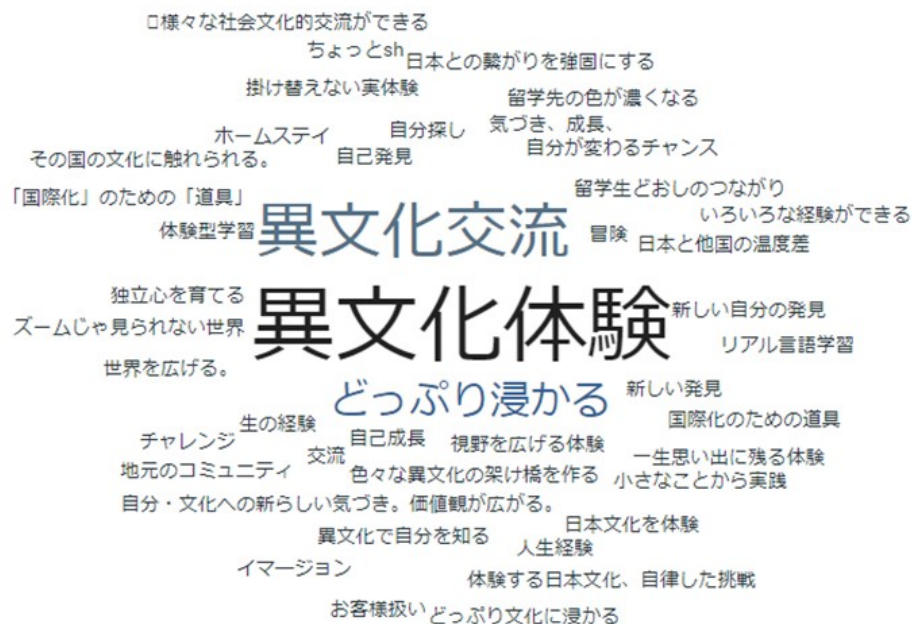


図2 ラウンドテーブル参加者が抱いている「滞在型留学」のイメージ

図2では、「異文化体験」がダントツで最も多くの人に書き込まれた言葉であることを示しています。「異文化体験」について「異文化交流」、そして「どっぷり浸かる」という言葉も上位にあがっています。ラウンドテーブル参加者の多くが留学経験者ないし海外在住経験者であり、ご自身の経験を踏まえてお答えいただいているものも多かったのではないかと思います。留学先の生活に「どっぷり浸かり」、いろいろな「異文化体験」と「異文化交流」をします。そして、それを通して、「新しい自分が発見」できたり、「世界が広がったり」します。それは「掛け替えのない経験」であり「一生思い出に残る体験」で、そして、「ズームじゃ見られない世界」でもある……というのが「滞在型留学」の共通イメージだとまとめることができるでしょう。

ただ、現在は、海外の国へ行って一定期間そこで暮らしながら勉強するという昔ながらの「滞在型」の「留学」がコロナウィルスのせいで実現不可能となっています。今、この時点において、日本語教育に携わる現場教師は、留学を希望する学習者にどのように向き合えばいいのでしょうか。留学すれば何ものにも代えがたい経験が得られることが期待できるから、コロナが収まるまでひたすら待つことを学習者にすすめますか。あるいは、もうビフォー・コロナの時代には戻れないと見極め、「新しい留学」の形を編み出しますか。コロナ禍が終息して、国境をまたいだ人の往来が可能になったときには、どんな「留学」の形のプログラムを作り込んでいけばいいのでしょうか。

「正解」は、誰にも分かっていないのです。分かっていないからこそ、私たちが主体的に考えて、「こうしよう」と決めていってもいいのではないのでしょうか。「危機」に立ちすくむのではなく、これを「岐路」と考えて、自分で道を決めていく……その始まりが2020年という年なのではないかと思います。

#### ちょっと蛇足です

最後に、留学生受け入れ側の立場から、ふと過去の留学生について思い出したことを付け加えます。それは、特に夏期日本語集中講座の留学生に多い印象があることなのですが、「日本に留学すること」そのものが日本語学習の動機でもありゴールでもあるというケースが少なからずあったということです。

憧れの日本に行くために日本語の勉強を始めた人もいましたし、日系人子弟で、子供の時から日本語を勉強しており、大学での日本留学を最後の「ご褒美」として設定していた人もいました。そんな留学生が毎年のように来ていたのです。まるで修学旅行生のようにうれしそうに来日し、たっぷり日本の生活を満喫して帰っていった彼らの姿が今でも鮮やかに目に浮かびます。

これが逆に、日本留学という魅力的な目的がなかったとしたら、果たして彼らは大学で日本語のコースを選択していたでしょうか。

日本に行くことそのものが一部の日本語学習者にとっては魅力であり目的であり動機づけを高める原動力でもあるのです。それを思うと、日本に行けないというこの状況は、日本語教育の世界全体にとって大きな危機であると認識すべき事態なのかもしれません。